

八月踊りの現在

—笠利町笠利集落を事例として—

西元 久明

鹿児島大学大学院人文科学研究科博士後期課程

The Present Condition of *Hachigatsu-odori*

— A Case Study of Kasari Village —

NISHIMOTO Hisaaki

Ph.D. program student, Graduate School of Humanistic-Sociological Sciences,
Kagoshima University

The *Hachigatsu-odori* are the dances of ancestor worship, thanks and prayer for rich harvests traditionally performed in Amami Island. They have become symbols of inhabitants' consciousness in particular villages. But some villages have forgotten their *Hachigatsu-odori*. On the other hand some of the people who have left their villages to live elsewhere have conserved them. The purpose of this survey is to report the present condition of *Hachigatsu-odori* and their conservation in Kasari village.

Key words : Amami, Hachigatsu-odori, Kasari village

はじめに

八月踊りとは、旧暦八月、祖先祭祀と豊作の感謝、祈願のからみあった、奄美で「^み三八月」とよばれる夏正月に踊られる踊りである。チヂン（太鼓）のリズムに合わせ、人々が輪になり、男性群と女性群で交互に八月踊りウタを掛け合いながら踊られる。シマ（集落）社会において八月踊りは、三八月のみならず、敬老会といった人々の共同体行事のなかで踊られてきた。この点で八月踊りは、シマの共同体意識を象徴する踊りといえる。しかし近年、経済基盤や社会組織の変化に伴って、人々のシマ社会への意識自体も変化し、また過疎化と本土への人々の流出により八月踊りが衰退しているシマもある（このシンポジウム当日、本報告者の発表後の質疑応答では、数人の喜界島出身者から、テープに録音された八月踊りウタに合わせて踊られているという現状も報告された）。一方、シマの外に就職等の理由で流出した人々により、アイデンティティの再確認として八月踊りが保存、踊られている郷友会（同郷組織）もある。鹿児島市においては、笠利町笠利集落（以後、大笠利集落）の出身者で構成されている大笠利親睦会がこれに該当する。今回、本報告者は親睦会メンバーらの三八月の帰郷に同行させていただくというフィールドワークの機会に恵まれた。記して感謝申し上げる。本報告ではこのフィールドワークに基づいて、「八月踊りの現在」を概観したい。

ところで、本テーマ「八月踊りの現在」が語られるためには、経年的な調査が必要であることはいままでもない。しかし、シマウタの研究に日が浅い本報告者は、残念なが

らその経験を持たない。そのため今回はあえて、帰郷者の視点をお借りすることで、八月踊りの過去と現在を比較しようと考えた。十数人の帰郷者のほとんどが、八月踊りの時期に合わせて帰郷するのは二、三十年ぶりとのことである。そのため八月踊りの過去と現在を比較することは、かれらにとり容易である。

1. 大笠利集落と大笠利親睦会

大笠利集落は人口約千人、奄美大島北部の笠利町の太平洋側に位置している。三区に分かれ1区が城前田地区、2区が里前地区、3区が金久地区となっている。奄美で伝統的なシマの地域区分、里（山側）と金久（海側）といった二つの地区に分かれているのではない、めずらしい地域区分であり、奄美大島全体からみても人口の多いシマである。それゆえ鹿児島市内で大笠利親睦会が、郷友会としては活発な活動をみせている。

大笠利親睦会はその成り立ちが今から約五十年前で、現在、約八十世帯が加入している。年間の活動行事としては1月の役員人事の総会兼新年会、5月の笠利町の郷友会全体の敬老会、9月の親睦会独自の敬老会、そして隔年の花見を兼ねたバスツアーが行われている。さらに2004年11月には6年ぶりの「餅貫い踊り」を、親睦会メンバーや他の奄美出身者が多く住む鹿児島市三和町とその近隣地域で行い、ハナ（祝儀）として多額の活動資金を得た。それぞれの行事でシマウタの発表や八月踊りが行われるのみならず、最近では様々なイベントに招かれ、ウタや踊りの発表の場が持たれている。その親睦会メンバーの間で2005年の初め、八月踊りの時期に合わせた帰郷の計画が持ち上がり、十数名が参加することとなった。



大笠利親睦会による「餅貫い踊り」



敬老会における「六調」

2. フィールドワークの経過

2005年9月14日から16日、三八月の後半である「シバサシ」に大笠利に滞在、帰郷者らはそれぞれの実家や親戚、友人の家に分かれて滞在する。本報告者は1区域前田地区の出身者宅に宿泊する。八月踊りは午後7時半に始まり深夜まで続く。踊りは一か所で踊られるものではなく、各家々の清めの踊りであるため、移動しながらの踊りである。以前は各家々、一軒ずつをまわっていたが、現在では数軒分をまとめて路地や軒先、広場で踊られるようになった。大笠利の三区でそれぞれ同じ日、時間帯に踊りは行われているため、本報告者は各区を移動しながらの調査となる。各区で、踊りに参加している人数、各区の世帯数、伝承されている八月踊りウタのレパートリーで、一か所の踊りの時間と、そのあと振る舞われる食事のための時間の長さには違いがあった。次に各区の八月踊りの現在を概観しよう。

3. 八月踊りの現在

1区, 城前田地区

城前田地区の八月踊りウタは、現在の60歳代の人々でも容易に理解できない古態を残しており、難解であることが知られているという。そのため踊る人はいてもウタっている人が少ないように見受けられた。しかしながら、各区に共通することであるが、近年、若い世代や子どもの参加が増え、かつて子どもが参加することが許されなかった時代より、はるかに寛容になったことが帰郷者らから多く聞かれた。それは、一通りの踊りの後の「六調」のウタや三味線、チヂン（太鼓）、さらにハナ（祝儀）の披露を、20歳代の若い世代が務めることにもみられ、帰郷者らによれば昔では考えられないことだという。若い世代の積極的な参加は「元ちとせ現象」による、シマの文化をみなおすようになったことも関係しているだろう。

2区, 里前地区

大笠利集落で最も人口の多い里前地区では、年長者の、地域文化を継承しようという意識が非常に強く、大笠利集落全体でシマウタの伝承を行う「大笠利わらべしまうたクラブ」はこの地区で生まれ、全国的に活躍している若手のウタ者、吉原まりかさん、中村瑞希さんを輩出している。また八月踊りの練習も「里前集落八月踊り勉強会」として八月踊りウタの歌詞集をつくり、月に二回の練習を行っていたという（この歌詞集については文末にその曲目のリストを示す）。踊りへの参加者は多く、特に若い世代は青年団を結成し、かつての里前地区の小字をローマ字でデザインしたTシャツを着ているのが印象的であり、この地区での地域文化の継承が功を奏していることを象徴していた。ちなみにこの里前地区では、今回の八月踊りで三百万円を超えるハナが集まった。

3区, 金久地区

金久地区も人口が多く、踊りは大規模なものであった。大笠利集落は住民の三割近くがカトリック信者という、日本でも有数の信者の多い地域であるが、この金久地区にある大笠利教会のシスターも制服姿で踊りに参加していた。さらに、島外から赴任している小学校の教師がハナの披露を行うなど、帰郷者によれば、これらはいずれもかつてはみられなかった光景であったという。八月踊りの特徴としては、他の二区より遅いテンポでウタい踊られ、これは金久地区の人々はゆっくりとしゃべるといふ住民気質の表れであるという。



城前田地区の八月踊り



里前地区の深夜のウタ遊び

まとめ

現在の太笠利集落の八月踊りに共通することは、若い世代の参加が増えたこと、またその世代に年長者が、八月踊りにおける重要な役目を任せるようになったことである。特に里前地区にみられたことであるが、若い世代のシマ社会と文化に対する意識の変化と、年長者からかれらへの地域文化の継承が功を奏し、その活性化により、八月踊りが衰退どころかこれからさらに隆盛していく例をみることができた。今回のシンポジウムのテーマ「しまうたの未来」という観点から、地域全体でシマ独自のウタを掘り起こし、その伝承に努めるスタイルは特記すべきことである。シマウタの伝承は現在、個人の教室により担われることも多くなった。そのため、あるシマの出身者が別のシマで教えるとなると、場合によってはそのシマ独自のシマウタ文化、つまりそのシマ独自のシマ口の発音や節回し、歌詞が失われるといったことも起きかねない。当然そこではシマウタと八月踊りの乖離も起きる。地域がシマウタと八月踊りの両方を伝承することの重要性は、里前地区が証明している。奄美において「なつかしさ」とよばれる最大の美的賛辞は、シマウタにおいて、各シマジマのシマ口や節回し、三味線の奏法といった独自性の集積、すなわちシマの匂いをなくしては成り立たないからである。

先に八月踊りが、人々の共同体行事のなかで踊られてきた点で、シマの共同体意識を象徴する踊りといえると記したが、八月踊りの集団性は、さらにウタ遊びを媒介とし、個人性が先行する現代の華やかなステージ上のシマウタと表裏一体となることで「しまうたの〈豊かな〉未来」を約束するだろう。

参考文献

- 中原ゆかり：奄美の「シマの歌」、弘文堂、1997。
 日本放送出版協会編：日本民謡大観（沖縄・奄美）奄美諸島編、日本放送出版協会、1993。

補足資料

以下、里前集落八月踊り勉強会の『八月踊り歌詞』に収録されている八月踊りウタの曲名を示す。八月踊りウタの曲名、[] 内にその別名、() 内に「クズシ」（それぞれの八月踊りウタにあわせてウタわれる別の曲）を示す。この歌詞集には同じ曲名でも異なる表記がみられるが、ここでは歌詞集の表記に従う（例えば、「ヒヤルガフェ」と「ヒヤルガフェー」など）。

1. うぶくれ ^{おこほり} [御礼歌、いそあんがま]
2. 祝つけ（クズシの曲名は示されず）
3. まけまけ
（東立ち雲・デンカイ主・ナカバルショウタヤ・ヒヤルガヨイスラ・まけまけ）
4. 赤木名観音堂（うんにゃだる・ほこらしやや・稲すり節）
5. 庭ぬ糸柳（どんどん節）
6. しゅんかねくわ（しゅんかねくずし・どんどん節）
7. やんごらぬいぶ（芦花部節一番・今ぬ風雲）

8. 曲りよ高ちぢ (まけまけ)
9. 喜界や湾どまり (ヒヤルガヨイスレ・まけまけ)
10. うしゃだり [ヒヤルガフェ]
(ナカバル主・ヒヤルガヨイスレ・デンカイ衆・まけまけ)
11. あがんむら (ナカバル主・ヒヤルがよいすれ・デンカイ主・まけまけ)
12. あじそえ
(塩道長浜・エンヤレコレ・なかばる主たや・うてぼうちぶしゃや・まけまけ)
13. 人が嫁女 (芦花部一番・うんにゃだる・ほこらしゃ・今ぬ風雲)
14. うらとみ [宇宿踊り]
15. ねんごろじゅ [天川]
16. 港川水
17. トンパラぬ石 [ちじゅりゃ]
18. つづごだぬうみ [うんぬつゆ]
19. サンバヌフェ (ヒヤルガフェー・なかばる主たや・ヤーユヌフェ)
20. うりゃげどり (エンヤレコレ・まけまけ)
21. やそれのといとい (なかばる主・ひやるがよいそれ・まけまけ)
22. ひやるがといとい (ひやるがよいそれ・まけまけ)
23. 廻りあんど
24. かんでく [あぶしながれ, 縁ぬながれ]
25. いそ踊り
26. ナラベ歌